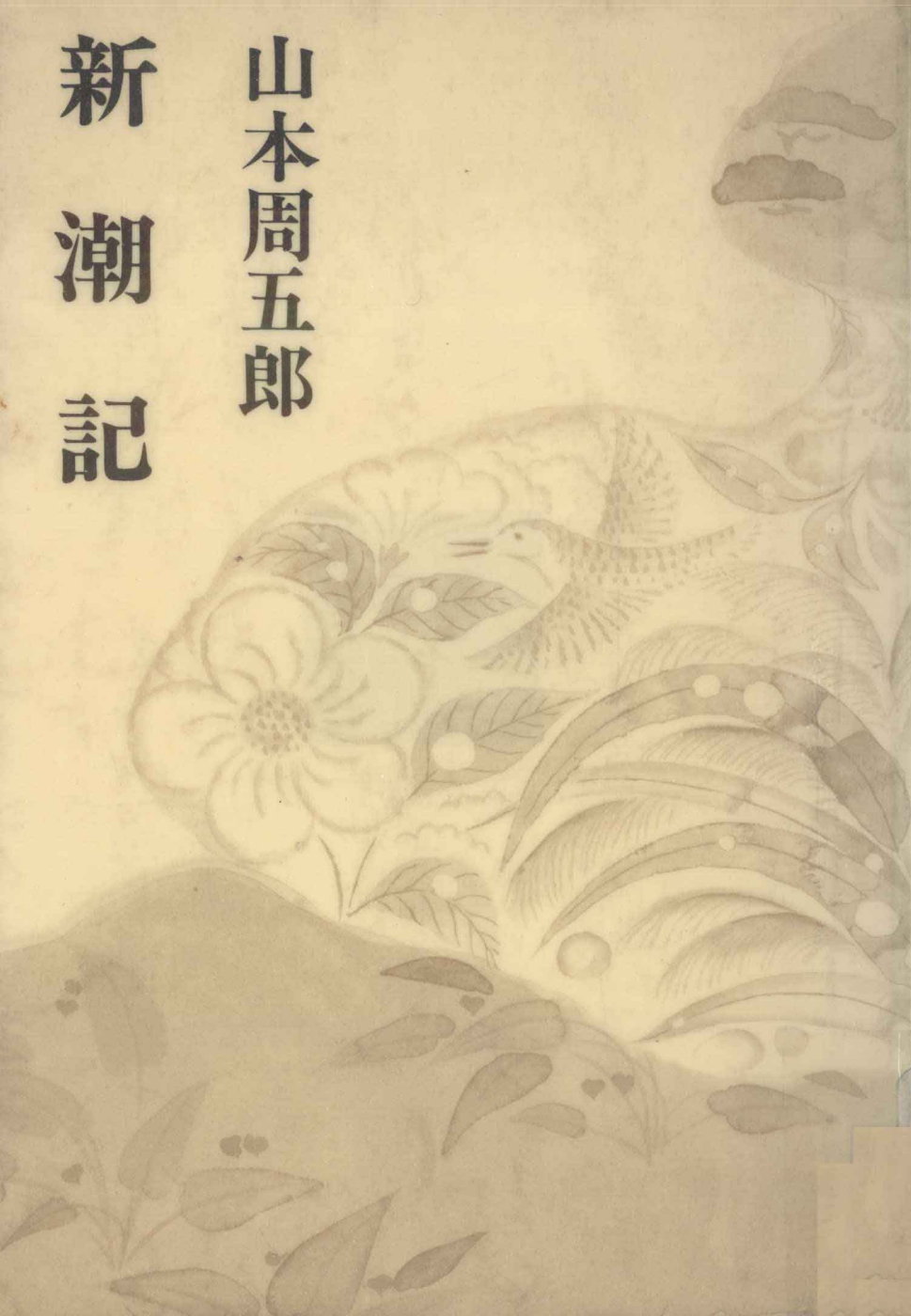


山本周五郎

新潮記



新潮記

山本周五

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1970

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

新潮記 (山本周五郎小説全集・別巻4)

昭和四十五年二月二十八日発行
昭和五十三年三月二十五日十三刷

定価八五〇円

著者 山本周五郎

著作権者 清水きん

発行者 佐藤亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 共同製本株式会社

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五二二一

編集部(03)二六六―五四二一

振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



新
潮
記

風雪の中

—

嘉永五年五月はじめの或る日、駿河のくに富士郡大宮村にある浅間神社の社前から、二人の旅装の青年が富士の登山口へと向っていった。参道を掃いていた宮守の老人がそれをみつけて、「もしもし」と呼び止めた。

「あなた方はお山へお登りかな」

「ああそうです」背丈の低い方の青年がふりかえって答えた、叱られるとも思ったものか、人の好きそうな円い顔が赤くなった、「そうです、これから登ろうと思うんですがなにか御禁制でもあるんですか」

「べつに御禁制というほどのことはありませんが、おまえさん方はもうお山には馴れておいでか」

「いや初めてですよ」

「剛力はお雇いでしょ、荷を背負ったり道の案内をしたりする男です、下の宿でお雇いにな

つたでしよう」

「それは、その、なんですか」

青年は困ったようにますます赤くなり、つれの方へ救いを求めるような眼を向けた。しかしつれの青年はまるでこっちの問答など聞えもしないようすで、片方の脚からだの重みを支えながら、岳樺（たけかんば）の芽ぶきはじめたみずみずしい枝をうっとりで見あげていた。

「で、それは、その、雇うきまりになつてはいますか、つまりその剛力というのを雇わないといけないことにでも」

宮守の老人は笑いだした。

「わたしはそんなことをいつているのではないのです、お山開きは毎年六月で、そのまえにはよくお山が荒れるのです、朝のうちお天井まで晴れていても一刻すると大風が吹きます、ひと晩のうちには五合目あたりまで雪のつもるようなことが、五月ちゆうにはよくあるのです、まったくのところお山開きまえの陽気の変りめは誰にも見当のつかぬことがあるのですからね、あなた方ももしお山になれていらつしゃるか、剛力でもおつれにならぬかぎりは危のうございますよ、わたしはこう申上げたかつたわけです」

「ああ、それはどうも、どうも、それは御親切にありがとう、たしかにそのとおりでしょう、わたしもそれは聞いているのだが……」

「ほかの山とは違いますでな」老人は箒（ほうき）をつかいはじめながら云った、「このお山ばかりは血氣にまかせて登るととりかえしのつかぬことになります、どうしてもお登りなら剛力を雇つておいでなされ、老人の云うことは背（き）いて損のゆかぬものです」

「まったく、いやたしかにそのとおりでしょう」

かれはまたちらとつれのほうへ眼をやった。それから老人を見た。もうひと言すずめて貰いたいらしい。しかし老人は諄くは云わず、箒をつかいながら御手洗の方へと去っていった。するとそれを待っていたというように、つれの青年はしずかに、しかし大股のしっかりとした足どりで道を登りはじめた。

南東の微風のわたる道を、二人はずんずん登っていった。

背丈の高い方は武家であらう。腰に大小を差しているし、総髪にきゅっとひき詰めてむすんだ髪さきびんの横よこに面擦れの痕がある。かなりひと目を惹く顔だちで、むしろ美男といってもいいくらいであるが、眼つきや唇もとになんとなく人を蔑むような色がある。それが年齢が若いためと知りながら自分で抑えようとせず、ときには意識してそれをむきだしに示すのが、この青年の場合には「絶望せる人間」という印象を与える。かれは早水秀之進といい、讃岐の国高松藩の郷土の子であった。

片ほうの背丈の低い若者は、おなじ高松の豪商、太橋市三郎の二男で大助という。年は秀之進より一つ上の二十三歳であるが、真底から兄事しているようすでなにごとも秀之進の云うままだった、というよりも秀之進の考えることをすばやく察して、相手がなにも云わぬうちにそのとおりにするという風だった。尤も多くの場合それは見当はずれになるのだったが。……かれはきわめて明るい気質で、口達者で、いつもなにか話してないと気の済まぬほうだった。豪商の子で金に不自由はなし、学問もできるし、人品も（少し背こそ低い）なかなか立派である。

「してみると」大助は息をつきながら、「してみると、つまり、どうでもわれわれは登るわけなんだな」

答えはなかった。

「わたしは構わないがね、わたしは大抵のことは凌いでゆける健康を持つてるが、早水さんはからだか細いからな、宿の者も云うし、あの宮守も云うし、山開きまえの危険な時期は避けたほうがいいと思うがな」

秀之進はやはりなんとも云わない。あたりの樹々は少しずつ様相を変えて、落葉松のいぶし銀のような芽ぶきがちらほら見えはじめてきた。坂道はしだいに急になる。黒い尖った鎧岩の砂粒が草鞋と足袋の間にはいつてあるきにくい。道をはさむ林は深くなつてそよ風も通わなくなり、日光は雲ひとつない青空からじりじりと照りつける。郭公が一羽、よく響くこえで鳴きながら二人の頭上を低く飛び去った。

「富士へ登るのをはじめから目的にして来たのならこんなに諄くは云いたくないんだが、なにしろ急に思い立っただけなんだからな、おい富士へ登ろう、と仰しゃる、よろしい登ろう、天気もいいし、せっかく通りかかったものだ、よしきたというわけだ、つまりそんな具合に簡単に考えていたんだから、これは少し乱暴だよ、むしろ無法だよ、だって宿の者も宮守の老人もあれほど云っているんだからな、え……なに云ったかい」

「なにも云わないよ」

秀之進はしずかにそう答えた。

「それは結構、つまり、なにも仰しゃらないというわけだ、文句はない、云うだけの値打もない、おい待って呉れ、ちよつと足袋の中の砂を払うから」

道は矮草帯へぬけ、さらに裸の砂と岩地にかかった。秀之進はずんずん登ってゆく。休みなしである。足どりはゆっくりしているがさすがに堪えるので、大助の饒舌もだんだん途切れだした。二合目へたどり着いたときには肉の厚い胸を苦しそうに波うたせ、あたりを見まわしながら

ら、「早水さん、ぜんたい富士山はどこへ行っちゃまったのかね」というのが精々だった。

二合目の岩屋でかれらは夕食をした。石の竈かまどに備えつけの鍋なべで持って来た糰ぼしをもどし、干味せみ噌そをまぜた雑炊を作つて喰たべた。そしてひと休みするとすぐにまた出発した。

夕頃まえから山のまわりは密雲に閉ざされていたが、二合目の岩屋を出ると間もなく風が吹きはじめた。北東の寒冷な風だった。凜冽りんれつという文字のびたりはまるもので、皮膚をさき骨をさすかと思つた。さつきまでは登つていさえすれば温かかった。立ち停ると肌はだに粟が立つほど寒さを感じても、足を動かしているあいだは汗ばむくらいだった。しかし今はいくら足に力をこめて登りつづけても温かくなならない。気温はぐんぐん低くなる。踏みしめるたびに地面の凍つてるのが足の指から這はい登つてくる。どうかするといま喰べたばかりの物が胃の中でこちんと凍つてしまひそうにさえ思つた。

「……大さん」秀之進がふと気づいたように、「北風が吹くと寒いね」
「……………」

大助はあつげにとられた、それから急に腹が立ってきたらしい。

「へえ！ 寒いですか」と、がたがた震えながら云つた、「これが寒いというんですか、冗談じゃない、あんたは実にいい人だがそれが悪いよ、そういう云い方はないと思うがね、北風が吹くと寒い、それは人をばかにすると云うものだよ」

「じゃ寒くないのかい」
「わたしは黙るよ」

本当にかれは黙つた。言葉は胸にいっぱいにふくれあがっているのだが、疲れがひどかつたし、口をきくだけからだの精力を消耗しそうな気がする。

——なに、早水だって人間だ、いつまでからだが続くものか、こうなれば意地くらべだ、そう
思つて登りつづけた。

風はいよいよ強くなり、やがてなにか顔に当ると思うと、それは粉のような雪だった。つまり
宮守の老人の言葉が偶然にも事実になったのである。闇は濃く道は峻しかった。尖った岩が突き
出でいて、うっかりすると爪先を痛める。寒気はますます敵しくなり、吹きしまく雪はたちまち
からだの片がわに板を立てたように凍りつくのだった。

大助が少しづつ後れるのを気づかぬとみえ、秀之進は大股に、しっかりした足どりで登ってい
た。

二

八合目と思える岩屋へたどり着いたのは、あたりが微かに白み初める頃だった。
「腹を拵えていこうか」

秀之進が云った。こんどは大助が答えなかった。実は答えようにも舌が動かなかったのであ
る。秀之進は岩屋の入口へ下りていって、吹きつけた雪の凍りついていて重い引戸をあけた。そ
して思わず眼を睜った。岩屋の中の炉に赤々と火が燃えている。その火のそばに、今まで寝てい
たのであるう、二人の人影が半身を起こしてこちらを見ていた。

「あとを閉めて呉れ大さん」

そう云つて秀之進は炉端へ近寄つていった。挨拶をするつもりだったのである。すると半身を
起こしていた一人が、掛けていた蒲団をはねたと思うと、いきなり刀を抜いてこっちの鼻先へつ

きつけながら叫んだ、「とうとう来たか」

「……………」

秀之進はじつと相手を見た。

「いつかは来ると覚悟はきめていた、命が惜しくて逃げていたのではない、時節の来るのを待っていたんだ、しかし嗅ぎだされた以上は逃げも隠れもせんぞ、斬れるなら斬ってみろ……藤尾、みぐるしいまねをするなよ」

「はい、生死とも兄上さまと御一緒にございます」

秀之進は驚いてそつちを見た。もう一人は女である。蒲団をはねて、手早く身ごしらえをする姿はまだごく若い娘だった。男のほうも二十三四だろ、病臥でもしていたとみえ、蒼白けた骨ばかりのからだつきである。眼は落ち窪んでいるし、頬骨は高くとがっているし、ぜんたいに瘦弱して吐く息は火のようだった。……いったいこの兄妹はどうして此処にいるのだらう、山開きまえの、人の近寄らぬ富士の頂上へなんのために籠っていたのだらう、それよりもこんなに弱っている兄をどうして伴れて登れたのか。秀之進はそんなことを考えながらじつと押し黙っていた。

「どうするんですか」大助がたまりかねて前へ出た、「いったいどういうわけです、あなた方はどなたです、われわれは今日、いや昨日ふいに思いたって此処へ登って来た者で、誰を捜しに来たのでもなし誰に恩怨もありません、どうか落ち着いて下さい、人違いをしないで下さい、お願いします」

「黙れ、貴様たちがおれを斬りに来たのでなくて、なんのために季節はずれの今頃ここへ登るか、なんのために夜を徹してこの岩屋へ来る要がある」

「それはまさにそうです、わたしが訊きたいくらいのもですよ、だが云って見ればそういうまわりあわせになつたんですね、わたしは登るのをよそうと云つたんです、二合目で泊ることも……」

「大さん、飯を拵えるよ」

秀之進はそういって、土間の隅にある釜戸かまどのほうへと去った。

「それでもお疑いが晴れないのでしたら」と秀之進のほうを見やりながら大助は云つた、「生国と名を名乗りましょう、二人とも讃岐のくに高松の者で、あれは早水秀之進、わたしは太橋大助といひます、江戸から水戸へこころざしてゆく途中なのです」

「兄上さま、お人違いのようでございます」

「水戸へ、水戸へおいでか」兄のほうは妹の言葉も耳にいらぬようすで、そこへ刀を置き、にわか眼を輝かしながら坐り直した、「あ、あ水戸、拙者せつしやにもあこがれの地です、だがもう行ける望みはない、このとおりのからだですから……そして、水戸へいかれるとすると、おそらく東湖先生をおたずねなさるのでしようね」

「さあどうなりますか」相手のようすが急に変わったので大助はほっとすると同時に少し気ぬけがした、「どうなりますか、おたずねするつもりではいるのですが」

「是非とも、是非ともそうしなくてはいけません、これからの日本の動きの原動力は水戸にある、水戸の原動力を燃やすものは東湖先生です、こう云うとおそらくあなたは妄言まがことばだと思ひになるでしょうが、それはあなたがまだ水戸を知らず東湖先生の精神を知っていないからです」

男は一瞬まえに激発した昂奮こうふんとは別の意味で、一種の偏執狂とも思える情熱に駆られて語りだした。それはもうごく云い古されたありきたりの説で、なんの新味もなかったし退屈きわまるも

のだった。幕府の税政を鳴らし、尊王を叫び攘夷を唱える、聞く者にとってそれが退屈であろうと無味乾燥であろうと構わない、そんなことはどちらでもいい、かれはただ自分で自分の言葉に酔っているだけなのだ。大助はうんざりした、うんざりしながら、それとなく妹のほうを見やっ

た。
藤尾と呼ばれる娘は十七八でもあろうか、眉のきわだって美しい、陶器のような冷たい白さの肌をした、どこか憂いを湛えた顔つきである。細面のところは兄に似ているが、唇もとの凛として力のある線、人を見るとききの眸子の射止めるような光りは、兄と違って熱狂することを知らない、しずかな、むしろ冷たくさえある理知の質をあらわしている。

——これはなかなかの娘にちがいない、大助は心のなかでそう思った。いったいどういう身の上だろう、武家には相違ないが、こんな所へ兄妹だけで籠っているところをみると、親類とか縁者とかといった者もないのだろうか。

「兄上さまお疲れになります」娘は大助が兄の話を聞いていないのを察したのであろう、ちょっと不快そうに眉をひそめながら、そっとすり寄って兄の肩を抱えた、「どうぞすこし横におなりあそばせ」

そのとき折よく、「大さん飯が出来たよ」秀之進が呼んだので、大助はいいしおに会釈して兄妹のそばから離れた。

熱い味噌雑炊をすすりながら、秀之進は相変らずなにもいわないけれど大助は疲れも飢えも忘れるほど、このふしぎな兄妹のことに心を奪われていた。……岩屋のそこには風雪がたけり狂っていた。引戸の隙間がひゅうひゅうと悲鳴をあげ、時々さつと粉雪さえ舞いこんで来るが、燃えさかる炉の火熱で小屋の中は汗ばむほど暖かかった。……妹は兄をようやく寝かせ、その枕もと

に坐つてじつと顔を見まもっている。すすけた髪、疲労のかげの濃い頬、憂いを刻んだ眉、貧しい木綿物の衣服、大助は絶えずそっちへ眼をやりながら、胸が重くなるほど哀憐の情に駆られた。

——兄のほうはもう長くは生きられないな、かれはひそかにそう思った。もし死んだら、あの娘はいったいどうするだろう、遺骸いがいの始末、自分の身のふりかたをどうするだろう、いや捨ててはゆけない、かれはさらに心でつぶやいた。これを見捨ててゆくという法はない、早水にもそれはわかる筈だ、かれの用務がどんなものか知らないが、この頼りない娘を捨てていっていい道理はない、だって、こんな富士山へ登るような気まぐれをする暇があつたんだからな。

食事が終つて、大助があと始末を済ませると、しかしもう秀之進は出発の支度をしていた。冗談じゃないと大助は思った。おれはでかけはしないぞ……。

「いくぞ、大さん」

秀之進は笠をかぶつてさつさと引戸のそとへ出ていった。大助は娘がじつとこちらを見ているのに気づいた。しかしやはり身支度をして笠を冠り、兄妹のほうへ挨拶をした。

「どうもお邪魔を致しました」

「……この吹雪に」

娘はそう云いかけて口をつぐんだ。その射止めるような、じつと見上げるまなざしが、縫すぶりつきたい気持を表白しているもののように大助には思えた。

「お兄上は御病氣のようにおみうけしますが、薬はお手許にお持ちですか、もしなんでしたら下からお届けさせてもよろしいと思ひますが」

「御親切はかたじけないが」と兄のほうが答えた、「薬をのんだところで長い命ではない、から

だはもう自分で捨てて居るのです、どうかお構いなくお立ち下さい、そして、多分こう申しても誤りはあるまいが……どうか王事のために身命を抛なつておはたらき下さい」

「はあ、ではこれで」

大助は逃げるように小屋を出た。

「おーい早水さん」

呼んでみるが、声は口を出るなり烈風にもぎ去られてしまう。大助は精いっぱい足で登っていった。汗ばむほどの小屋の暖かさにゆるんでいたからだは、ふたたびすさまじい寒気にうたれて骨の髄ずまで凍るようだった。風は脚下から吹きあげ、また急に右へ変り逆風になって捲き返す。粉雪は幕を張ったように前後左右を押し包んでまったく視界を奪っていた。

八合目の少し上に、村山口から登って来る道と合うところがある。秀之進はそこに待っていた。

「すっかり明けたようだね」

大助が追いつくと、かれはそういつてすぐにまた登りつづけた。……胸を衝くような急斜面になり、巨きな巖が道へのしかかったり塞いだりしている。大助はひと足ごとうなに呻うなった。全身すっかり凍ったかと思う寒さなのに、肌を伝って汗の流れるのが感じられた。空気が薄くなっているために呼吸が苦しい、胸膈が圧されるような、ふくらむような妙な具合である。

——あの娘はどうするだろう、頭はそのことではいっばいだった。眼さきにはいつまでもその姿がちらついていた。あの男はたいした人物ではない、というよりもありふれ過ぎた人間だ、あの程度の浅薄な、無反省な尊王攘夷論者がうろろろするため、却って正しい道の進展が阻害されようとなさえている、それはまさにそのとおりだが、しかしともかくにも大義を口にすること

だけは嘘ではない、あの男が第一流の人物ではない、といったところで、それはあの男の責任ではないからな、浅薄でも無反省でも、あの男はあの男なりに大義を解し、道に向って闘っているんだ、……しかも余命はいくばくもない、あの男に万一のことがあれば、娘は誰を頼りにすることもできないんだ。

——いやいかん、断じていかんぞ！ 大助は決然と立ちどまった。

「早水さん待って呉れ」

「……………」

「わたしは戻るよ」吹きこむ粉雪に噎せながら、大助はまるで挑みかかるように云った、「あの二人をあのまま残してゆくのは人情を知らなすぎる、わたしにはできない、早水さん、あの男は長い命じゃない、あんたも戻ってひと休みしていつては……」

「戻りたまえ」秀之進は頷いてそう云い、腰の繻袋を取って大助に与えた、「俺は下りだから要らない、間に合ったら江戸屋敷で会おう」

そしてふりかえりもせず、大股で風雪の頂上へと登っていった。大助はあつけにとられたようにそのうしろ姿を見送っていたが、やがて踵をかえして岩屋へと戻った。